

牙王物語

下卷

戸川幸夫

牙王物語

下 卷

戸川幸夫

角川書店

牙王物語

下巻

昭和三十三年一月一日 初版印刷
昭和三十三年一月五日 初版発行

定価二六〇円

著者 戸川幸夫

発行者 角川源義

印刷者 中内あき子

製本者 鈴木俊一

発行者 角川書店

東京都千代田区富士見町二ノ七
振替口座東京一九五二〇八番
電話九段(33)〇一一(代表)

Printed in Japan

中光印刷・鈴木製本

落丁・乱丁本はお取替えいたします

目次

愛の恐れ

畏

大雪の悪魔犬

処刑の炎

死の追撃

流れる雲

強いられた戦い

反抗

めぐりあい

愛の甦えり

七

四

三

四

四

七

九

三

三

三

出陣

一七〇

山揺れ

一六九

消えた故郷

二二〇

まぼろしの王

二五二

あとがき

二七一

装幀 佐藤泰治

牙王物語

下卷

愛の恐れ

生物の世界は神秘にとざされている。

通信機や探知機や地図やコンパスを持たない彼らが、何をもって連絡し、何をもって方向を探り、間違いを起さないようにしているのであらうか？

アメリカ太平洋岸のオレゴン州シルヴァトンの喫茶店に飼われていたスコッチ・コリー犬のボビーは、主人夫妻に伴われてインディアナ州のオルコットに旅行した際、主人にはぐれ、北アメリカ大陸の三分の二以上四千六百キロを横断して、半年目にわが家に戻りついている。

カナダの鴨が北海道に渡ってきたり、南国に去った燕が、毎年正確に戻ってくるのはなぜだろうか？

何万という魚の大群が一瞬、一尾の例外もなく、まるで号令をかけられたように同時に方向転換をするみごとなマス・ゲームは、どうしてできるのだろうか？

蜜蜂が暗黒の巣の中で、手さぐりの8の字ダンスを行い、蜜のある方角と距離と時刻とを仲間に知らせるのは、どうした技術だろう？

鮭が四年目に自分の生まれた川に遡ってくるのは、なぜだろう？ 鰻が遠い熱帯の深海の底ま

で旅をするのは、どうしたわけだろう？

わからない。それを人間は「本能の働き」という単純な言葉で言い現わしている。

とすると、キバが然別湖しかくの見える山岳地帯にあって、ホロカイシカリ川上流地域の別の群に、変動が起きたことを感じ取ったとしても、そう不思議ではないかも知れない。

非常な速さで夏雲が動いてくると、キバは十二の配下をともなつて、高根が原に行つてみたい、という気持ちに支配されはじめた。今まで彼を抑えていた「あそこは戦いを挑んではならない女王国だ」という觀念が、すうっと薄れて消えていったからだ。

それがなぜだか、どんな力に依つてだか、筆者にもわからない。強いて言わせてもらふならば「本能の働き」によつてと表現しよう。

来る時は、月明の下をキバはただ独り流星のように走つた。

そのニペソツの頂を、いま彼は十二の配下をひき連れて、夏雲の下を悠々と歩いてゐる。

別に急がなかった。それは完全なる男性として、充実した精神と肉体とを備えた彼に、絶対の自信が湧き起こり、単にピシカチナイやペトウトル、ウペペサンケ、チカッベツ、ニペソツの山に囲まれた南大雪山地域だけでなく、北見、石狩、十勝にまたがる広大なヌタクカムウシユッペ（大雪山）の全域が彼のテリトリ（領土）として天から授けられたと感じ取つたからである。彼はかつての郷土に、十二の命知らずどもをひき連れて、凱旋しているのではなかった。彼の郷土はもう北海道の中央部を占めるこの雄大な山岳地帯全部であり、その地域に蠢くものは、すべて彼の支配下にあるものだった。

彼は支配者として、自己の領土を見回るのだ、という気位を持っていたと言つていい。

片目のゴンや赤耳や、そのほかにも彼の支配權を打ち立てるために、決戦しなければならぬ相手は残っていたが、いまのキバはそれを少しも怖れていない。

堂々たるヨーロッパ狼の肉体と日本犬の強い精神とが、戦う日に備えて完成されているからだった。

同時に彼はもう単独の犬ではなかった。この冬の飢えと、それに続く春山での共同生活によって、賢明な彼は、脳髓の底にこれまで埋もれていた本能を発掘し、共同作戦の重大な意味を悟った。

一対一の戦闘が（特別な場合を除いて）いかに愚かなものであるかも知った。それこそ狼や犬に与えられた「本能の働き」を最大限に利用し、命ずる者と従う者との組合わせで出来上る王国を築いたからであった。

彼は行きながら狩りをした。十二の配下は彼の手足のように動いて獲物を追い立て、キバにすぐれた指導者としての能力のあることを示した。

沼の原から五色が原にかけては一望千里といわれる湿原地帯が続いている。大沼、小沼、ひょうたん沼をはじめ無数の沼沢が点在し、霧が低く這っていた。

沼の中には蝦夷山椒魚が群れていた。この両棲類は水が涸れると、泥の中に潜ぐりこんで平気で生活する奴だった。

古生代から中生代にかけての太古、生物たちはこうして水から陸に移行していったのであろう。ちょうどそれを思わせるほど、このあたりの風景は原始的であり、神秘的であり、創造的であった。沼の岸では、豆娘が毛氈苔に捕えられて跳いていた。

キバはここでふたたびホシを見つけた。夜明け方で、霧が一面に立ちこめていた。その濃い霧の壁の中から、ひょろりとホシは飛び出してきたのだ。

ホシはどちらかという孤独が好きらしかった。この前の月明の夜も、彼女はひとりだった。そしてこの朝もひとりだった。

ホシは沼辺にきて突然に立ち止った。彼女を見つめて十三頭の犬が塑像のように、じっと霧の底に佇んでいるのに気づいたからだ。

恐怖が襲ってきて、彼女はさっと身をひるがえすと霧の中に飛びこんだ。

続いてキバが躍りこんだ。ちょっとした間を置いてドイツ・ポインター系の耳垂れが走りだし、耳の立ったのや、垂れたのや、尾の巻いてるのや、短いのが遅れじと追った。

逃げた者が、敵だか、味方だか、それさえわからずに彼らは走った。そんなことは彼らの指導者が決めればいいことだった。

ホシは軽快な疾走で力いっぱい飛んだ。からだの細く、しまっている彼女は走ることでは自信があった。

しかし追跡者は楽々となつてきた。自信は驚きに変わり、やがて彼女はこの相手が、いつかの追跡者であることに気がついた。すると気が楽になり、恐怖と敵意は消え、かえって親しみの情が湧いた。彼女は立ち止り、体を低く、柔らかくくねらせて甘ったれた鼻声をもらした。

うるみのある彼女の瞳は、ほんとうに星のように美しく輝き、立っていた両の耳はびたりと後にたおれ、尾の先が激しくうち振られた。

キバは自信をもって近づくと、彼女のなめらかな首すじの毛並みを優しく舐めた。

十二頭の配下が駆けつけたのは、キバとホシとの間に愛情が成立した後であった。

指導者が許した相手は、配下の者にとっては仲間であった。そしてホシの側からかすかに吹いてくる微風が、その新入りが女性であることを知らせたので、男世帯の仲間はどうも二もなかった。

彼らは、彼らの指導者が、守るように寄り添った新しい友人の後に従って忠別岳に向かった。「どうして貴女だけあんなところに来ていたんです？ 何かあったのですか？」

人間ならさしづめこう質問するところだろう。しかし獣にはそんな七めんどくさい感情はない。過去は問うところではないのだ。

この場合、キバにある感情はもっと直截的で、現実的だった。それは、

「得た——」

という感情であり、

「渡さない——」

という感情であった。山林で殺した肥えふとった蝦夷鹿が力で得た獲物なら、美しいホシは自信と愛情で得た獲物であった。どちらも渡せないものであった。

その思いは赤耳の側にもあった。

レッド・デビル亡きあとは、デビル一家は崩壊の危機に襲われた。家族の者は次ぎ次ぎと殺された。それは赤耳の指導力が、完全でないということを示すものであった。が、しかし彼は忠別岳に避退するということで、七頭に減った一家をまとめた。

ホシはその中の王女の地位にあった。ホシ自身は赤耳を嫌い、クロを避けてはいたが、彼らは

ホシを優秀なメンバーに算え上げていたから、当然二重国籍の彼女の帰属をめぐって、キバと赤耳との間に決闘が行われなければならない運命にあった。

それは大雪山の犬属支配権のゆくえを決めるものでもあった。

実際キバが赤耳とぶつかったのは、その日の午後遅くである。

日は西に傾きかけて忠別岳から平に至る稜線を一層とげとげしく浮き彫りさせた。積乱雲が一面に湧きあがり、それが崩れはじめて鼠色の裾を曳いていた。

稜線に沿って一番先頭を走っていたホシの足が突然に止った。稜線の東は急激な傾斜となつて暗い沢に続き、西はいくぶん緩かではあるが、さらさらとしたガレ場になつていた。

キバはホシの柔らかな味のある背越しに怒りと闘志で炎のようになっていて敵を見た。

赤耳は右手にクロ、そしてその背後に四頭の配下をひき連れ、ここまで駆けつけたところだった。赤耳が発見した犬の群の先頭は仲間だった。そしてその背後についてくる巨大な奴には見覚えがあった。戦おうとして挑んでも戦いを避け続けた弱虫だった。一度目は忠別の上流で、二度目は高根が原で相手は逃げていた。図体は大きい、恐るべき相手ではない、と赤耳は見た。彼はキバがレッド・デビルに対して、敬意を表したことには少しも気づいていなかった。

最初、赤耳はホシがそいつに追われているのだ、と思った。彼女はまっしぐらに彼の陣営に救いを求めて駆けこんでくるに違いないと信じていた。

だが、ホシは敵の陣営の中で立ち止まったままだった。彼の計算は狂い、そのために怒りは一そう激しく掻き立てられた。

両軍が陣を張った場所はどちらも小高くなつていて、その中間にやや低くなつた鞍部あなごがあり、

少しの広場をもっていた。

二つの野獣の群は、ホシを中心に約十メートルの距離で向かいあった。

群はそのまま化石となってしまうのではないかと思うほど長い間、動かなかった。

雲が黒く天を覆い、日がかげった。遠雷が響いた。

のそり……赤耳が第一歩を踏み出した。

人間に対する知識は、母のデビルに及ばなかったが、戦闘力では群一番であった。狡猾さでは、弟のクロに及ばなかったが、はるかに利口であり、身体はデビルより父のテツに似ていたが、性質はまったくの狼で勇敢で、冷酷で、残虐だった。

それが赤耳だった。群の首領としての貫録は十分だった。

赤耳が動きだすと同時に、キバも動きだした。

ホシの耳が恐怖で弓なりに反り、背毛が緊張で逆立った。

「？」

逃れるべき筈の敵が、逃げないのが赤耳を一そう怒らせた。

両陣営の犬たちは凍りついたように、身動きもせず、両将の決戦を見まもった。

赤耳が進む。キバも進む。

戦機は熟した。が、あるものは沈黙だけだった。風だけが、雨気を含んだ風の通りだけが、わずかな音をたてた。

相青眼に構えた剣客のように、慎重にじりじりと二頭の首領は迫っていった。

キバの方が距離の関係で、一步はやく鞍部についた。

ぴかりとした光が世界を銀白にした。同時に雷鳴が轟いた。それが向き合っていた緊張を破った。

右と左が同時に突撃し、一瞬、お互いの場を交換した。戦いは狼の流儀ですべて無声だった。キバはやや高く、赤耳は低目に構えた。

彼らはお互いに兄弟であることを知らずに、生命をかけて支配権を獲得しようとしていた。相手が鬨か、鹿か、少なくとも同族でなければ、配下の犬どもは唸りをあげて襲いかかったであろう。が、この場合は王位の決定戦であり、その冒すべからざる尊厳さを犬どもはみな理解していた。

だから、自然の轟きの外は、みな無声だった。

二度目の突撃は空中で起こった。

二つの毛皮は跳躍してからみ合い、牙と牙とがぶっつき合つて火を発した。火を発した——と見えたのはちょうどその時、またぴかりと稲妻が走り、雷鳴が轟いたからであった。

地上に落ちると首領たちは、さっと飛び離れて、お互いの隙を狙い合った。

毛がひきちぎれて風に飛び、血液が点々とガレ場に滴った。

こんどはキバから仕掛けた。

赤耳は立ち上がってキバの攻撃を受け、受け切れずによりめいて倒れた。

両方の群が、すわこそ——と立ち上がる。

しかし、さすがに赤耳はそれより早く跳ね起きて、キバに第二の咬み傷を与えさせなかった。ザーッと雨がきた。山の雨は激しい。雨は天地を白銀色に塗りつぶし、峰々を遠ざけ、消し去